

**京都大学教育研究振興財団助成事業  
成 果 報 告 書**

平成20年8月4日

財団法人京都大学教育研究振興財団  
会 長 辻 井 昭 雄 様

所属部局・研究科 京都大学 人間・環境学研究科

職 名・学 年 博士課程2年

氏 名 Maria Lucia Correa マリア・ルシア・コレア

事業区分	平成20年度・国際研究集会派遣助成		
研究集会名	第25回国際文学・心理学集会 (25th International Conference on Literature and Psychology)		
発表題目	三島由紀夫と身体的な文学 (Mishima Yukio and a Literature of the Body)		
開催場所	応用心理学高等研究所・リスボン・ポルトガル Instituto de Psicologia Aplicada, Lisbon, Portugal		
渡航期間	平成20年7月1日 ~ 平成20年7月14日		
成果の概要	タイトルは「成果の概要/報告者名」として、A4版2000字程度・和文で作成し、添付して下さい。「成果の概要」以外に添付する資料 無 有( )		
会計報告	交付を受けた助成金額	200,000 円	
	使用した助成金額	200,000 円	
	返納すべき助成金額	0 円	
	助成金の使途内訳 (使用旅費の内容)	飛行機代	169,420円
		学会参加費	23,957円
ポルトガルのピザ		11,189円	

## 成果の概要

国際研究集会派遣助成

報告者：マリア・ルシア・コレア

人間・環境学研究科博士課程 2 年

国際文学・心理学集会は、様々な国における映画・絵画、および文学作品の意義を心理学的に分析するとともに、そこでの知見を心理学や精神分析理論へと還元することで、人間性に関する知の国際的な共通枠組みを発展させることを目的とした集会である。

当年の7月1日から7日にかけて、リスボンの「応用心理学高等研究所」で国際文学・心理学集会の第25回が開かれ、欧米各国からおよそ81研究者が参加し、幅広い発表や討論が行われた。集会はテーマによって、28セッションに分割され、各セッションには2、3発表ずつに分けられていた。それぞれのセッションでは次のテーマが扱われた。

倒錯	カフカ
仏文	映画
眼差し	シェイクスピア
死と喪	絵
二十世紀英文	他者の地位
ギリシャ文学と神話	英詩
古典ハリウッド映画	ベルイマン
ラカン	独文
二十世紀フィクション	近代アメリカ文学
善と悪	ユダヤ系アメリカのフィクション
初期現代スペイン文学	フロイト
二十世紀スペイン文学	奇妙の位置
罪悪感と恥	詩
応用心理学	ホランド・ノームと精神分析理論

発表の多さやテーマの多様性で非常に豊かな研究会であったと思う。ホランド・ノーム氏という、約30年前に国際文学・心理学集会を設立した研究者の一人は精神分析や心理学が文学批判を発展させるためにどのような役を果たすべきか、そして、現代アメリカの政治という現象について精神分析的な思考は可能かという非常に興味深いテーマについて語った。しかし、精神分析的な文学批判は精神分析理論から独

立させられるべき分野であるという彼の断言に関して、予想より議論が少なかった。私は、これはおそらく、他の場で改めて扱うべき問題であるように思える。

一方、アムステルダム大学のレイボヴィッチ・ソランジュ氏の発表では、精神分析的な映画論の観点から「日本」という場所が不在や喪失の場として考察されていた。本集会の参加者は主に欧米の研究者であったので、欧米という枠組みの範囲外で見られる現象を扱うこの発表はとても興味深かったと思う。日本とヨーロッパの間にある言語的、あるいは文化的な相違点は当然ながら言及されていたが、最も重要な点は、「日本」という場所が西洋から幻想的な空間として見られているかどうかという課題であった。

私はこの集会において、日本文学の中でも重要な作家である三島由紀夫について精神分析の理論を用いて発表することによって、近代日本文学に見られる主体性に関して発表してきた。この発表では、三島由紀夫における「身体」という問題を精神分析理論、とりわけフランスのジャック・ラカンの概念を使用しながら分析した。三島の作品だけでなく、三島自信の長く続けたボディービルという体験を考察し、両者における三島の身体についての考え方を検討しようとした。

三島によって、身体というテーマは必然的に「行動」(Action)という問題と緊密につながっているようにおもわれる。ラカンの精神分析という観点から「行動」を検討すると、二つの枠組みに分けて考えることが可能である。一方で、上演のように見せるものとして行われる行動である「アクティング・アウト」があり、他方で、より極端な意味を持つ概念である「行為への移行」がある。行動という地点で三島が文学と身体を合流させようとしたことを精神分析の観念を通して考察したと思う。

そして、指摘された点に関しては、三島という人間と臨床的な空間や、三島の作品と文学批判ということを明白に区別すべきであるかどうかということがあった。

この発表は「ラカン」というセッションに含まれていた。本セッションに三人の発表者ともラカンの精神分析理論を用い、文学作品について発表した。CUNYのコ・ロシリン氏の「ハッピー・エンディングと享楽」やイリノイ大学のブレーキ・ナンシ氏の「イワン・マキワンの小説における性関係の問題」も、文学を通して精神分析的な概念についての考察をさらに深めるような発表をした。

集会の終了後、マドリッドを訪れ、将来の研究のためのスペイン語での参考文献を入手した。眼差しと声や喪の作業、また、身体と欲望に関する様々な文献が得られた。これらを今後の研究に使用したいと考えている。